

氏 名 緒方 しらべ

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1645 号

学位授与の日付 平成26年3月20日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」
の民族誌的研究

論文審査委員 主 査 教授 竹沢 尚一郎
教授 吉田 憲司
准教授 飯田 卓
教授 亀井 哲也 中京大学
教授 川口 幸也 立教大学
名誉教授 和田 正平 国立民族学博物館

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本論文の目的は、ナイジェリア連邦共和国の都市イレ・イフェで暮らす「アーティスト」を事例として、彼らの作品、市場、生活に注目した民族誌的記述により、アフリカの一都市の「アート」について考察することである。

本論文は、序論、4つの章、結論という6部構成になっている。序論では、これまでのアート（芸術・美術）をめぐる文化人類学の研究が非西洋のモノ（造形）と社会との関係を明らかにすることで、普遍的なものとなってきた西洋のアートや西洋美術界を相対化してきたことを述べた。ところがこうした研究は、モノを中心とし、モノそのもの、あるいはモノとそれを取りまく人との関係に注目しており、つくり手である「アーティスト」の視点に焦点があてられることはほとんどなかった。そこで本論文は、都市で暮らす「アーティスト」に注目し、約23か月間のイレ・イフェでの現地調査にもとづいて、彼らの作品、市場、生活を記述・考察した。

第1章では、まず前半において文献資料を用い、イレ・イフェが「ヨルバ発祥の地」であるという言説とともに、その地の「アート」が「ヨルバラしさ」を中心に語られてきたこと、そして、そのおもな舞台がフリースクール（ワークショップ）や大学美術学部であったことを概観した。これに対して、後半は現地調査にもとづき、現代イレ・イフェにおいてはどのような人が「アーティスト」であるのか、その枠組みを把握するために、36人のつくり手について、「アーティスト」という英語表現による彼らの自称に着目して検討した。そこで、イレ・イフェではヨルバ語も使用されているにもかかわらず、「アート」が話題になるときは、英語でしか成立しない言説空間が存在すること、また、「アート」は人びとの生活と結びついたグラフィック・デザインなども指すことを述べた。これによって、本章は、これまで語られてきたイレ・イフェの「アート」と、イレ・イフェで生活する「アーティスト」の視点による「アート」が異なる点を指摘した。

つづく第2章から第4章までは、筆者の現地調査によって明らかになった「アーティスト」について、より具体的に記述した。

第2章では、イレ・イフェで暮らす「アーティスト」の諸相を、彼らの作品の特徴と制作・販売の様子、暮らしと経歴から記述した。イレ・イフェでは、1) 伝統首長を対象にビーズ細工や木彫などをつくる人びと、2) 国内外のアカデミズムや美術市場、富裕層を対象に絵画や版画などをつくる人びと、3) 街の一般の人びとを対象とするグラフィック・デザインや教会の装飾などを手がける人びとが「アーティスト」として暮らしている。本章では、これら3つのタイプの仕事や作品、生活の特徴をあらかず15人を事例にとりあげた。そして、彼らが既存の様式を踏襲したり新たな作風をつくりだすこと、繁華街の店あるいは住宅地の作業場で作品制作にとりくむ姿や他都市で作品を販売する状況、さらに、個々が学校教育・徒弟制・独学で技術を身につけて「アーティスト」になっていく過程について記述した。これによって、イレ・イフェの「アーティスト」たちの多様な実践の様相を明らかにした。

第3章では、イレ・イフェの「アーティスト」が作品の販売によって現金収入を得てい

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

る点に着目し、彼らの市場を詳しく検討した。まず、「アーティスト」の経済的な生活の多様さをより具体的に把握するために、彼らと市場との関係に注目した。そこで、同じ「アーティスト」であっても、1)自分が希望する市場をもち、経済的に比較的裕福な者、2)希望するものでなくとも何らかの市場をもち、経済的に比較的生活の安定している者、3)市場はほとんどないが作品制作をつづける、経済的に苦境に立っている者がいることを、19人の「アーティスト」の事例によって示した。また、個々の「アーティスト」の意思や発言に着目することで、「アーティスト」が、「創造性」「独自性」「才能」「学歴」「資格」「訓練」といった彼ら自身の価値や基準をもち、しかし、「アーティスト」としての目標や希望と生活の不安定さや困難のはざまに暮らしている様子が浮かびあがってきた。

第4章では、イレ・イフェの「アーティスト」がさまざまな現状において作品制作・販売をおこなって生きていることについて、オンラインカというひとりの「アーティスト」のライフヒストリーと生活に焦点をあて、よりミクロな視点から検討した。その際、「アーティスト」について多角的に明らかにしていくために、第3章で検討した市場との関係や彼らの価値・基準に加え、彼らと周囲の人びとや制度との関係にも注目した。この作業のなかで、多様な作品を手がけるオンラインカが「アーティスト」になる過程において、また、「アーティスト」として生きていくにあたり、フリースクールや師弟関係、中学・大学における美術教育、海外の美術市場、さらに、地域社会における人びとの繋がりや相互扶助が重要な役割を果たしていることがわかった。また、オンラインカが好んでつくる作品とドイツのパトロンが求める作品が異なることから、アフリカ人の「アーティスト」による作品、つまり「アフリカ美術」が、他者、とりわけ西洋美術界との関係においてつくられていくことを指摘した。

結論では、以上の記述を通して以下の3つの点から考察をおこなった。

- 1) イレ・イフェの「アーティスト」の視点に立脚し、彼らの主体的な実践に着目することによって、作品を受容する西洋美術市場やアカデミズムの側がアフリカに期待するアートと、作品のつくり手であるアフリカの「アーティスト」の側が提供する「アート」が必ずしも同じではないことがわかり、西洋近代のアートの枠組だけではみえることのない「アート」の存在を指摘できた。
- 2) イレ・イフェの「アーティスト」の生活に注目することで、イレ・イフェの「アート」が美術教育や美術市場の点で西洋美術界と結びついている一方で、地域の人びととの相互扶助や地域の市場の点でイレ・イフェの「アート」が地域社会と結びついていることを指摘できた。
- 3) 本論文は、モノのつくり手である「アーティスト」に焦点をあてる方法によって、一都市の「アート」と美術界や地域社会との関係を示した。アフリカ人の視点から「アート」を再提示し、西洋でうみだされたアートという概念を相対化したという点は、冒頭で述べた従来の研究への新たな貢献だと考えられる。

博士論文の審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、西アフリカ・ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の活動の民族誌的記述を通じて、アフリカの生活世界の中で展開される「アート」のあり方を考察したものである。

本論文でいう「アーティスト」とは、イレ・イフェにおいて、自らを「アーティスト」と呼ぶ、もしくは他者から「アーティスト」と呼ばれている人びとをさしている。一方、「アート」とは、それらの「アーティスト」の生み出す所産で、「アーティスト」自身、および周囲の人びとから「アート」と呼ばれる対象をさす。ヨルバ語で、広くモノづくりの担い手を意味する「オニシェ・オナ」という語の指し示す範囲との関係でいえば、そのうち、自身の制作活動を生計の支えとしている人びとが「アーティスト」と呼ばれている。そうした人びとの活動が、本論文の議論の直接の対象である。

論文は、序論と結論を含む、6つの章から構成されている。

序論では、まず、非西洋世界におけるアートの研究史が批判的に検討され、本論文の位置づけがなされている。非西洋、とくにアフリカのアートについては、主として文化人類学の立場からアートと社会との関係に焦点をあてた研究が進められ、普遍的な美の規範を前提とする西洋の芸術研究を相対化することに一定の成果をあげてきた。しかし、そこでは、モノそのもの、もしくはモノとそれを取り巻く人びとの関係だけが取り上げられ、モノの作り手を主体として、その社会との関係を考察する研究は等閑に付されてきた。この点を指摘した上で、モノの作り手、すなわち「アーティスト」の視点から「アート」を描く民族誌として、本論文が定位される。

第1章では、イレ・イフェが「ヨルバ発祥の地」であるという言説の成立を、植民地統治とキリスト教布教の過程でヨルバというアイデンティティが形成されたこととの関連において論じることで、イレ・イフェのアートには常に「ヨルバラしさ」が求められてきたことが説得的に語られる。

第2章から第4章が、本論文の民族誌的記述の中心をなす部分である。

第2章では、イレ・イフェの「アーティスト」たちの活動を、ビーズ細工や真鍮製彫刻など伝統的需要に応じるもの、大学の美術教育の現場や国内外からの需要に応じるもの、グラフィック・デザインなど町の人びとの需要に応じるものの3者に分け、その多様なあり方が描き出される。

第3章では、イレ・イフェで「アーティスト」と自称する19人を取りあげ、彼らの生活実践と制作活動を、丹念に集めたインタビュー記録と家計の調査結果も踏まえて、生き生きと描き出している。

第4章は、本論文の白眉とも言うべき部分である。すでに第2、第3章で取り上げた「アーティスト」のなかからオンラインカという一人の人物に焦点を当て、そのライフヒストリーを追うかたちで、イレ・イフェにおける「アート」のあり方が浮き彫りにされている。フリースクールへの参加や中等学校・大学での西洋式の美術教育制度のもとでの研鑽、ヨーロッパのコンペティションでの優勝と、帰国後の活動、そして現状の経済的苦境と、にもかかわらず創作を続けようとする姿勢。その記述は、先行する第1章から3章までの記述

(Separate Form 3)

をオラインカという人物の半生の記述を軸に、より具体的なかたちで再編成する役割も果たしている。とりわけ、ドイツでのコンペティションで優勝し、海外で高い評価を得た、大胆な色使いと平面的な構成を特徴とする「アフリカの」な作品と、オラインカ自身が愛着をもつ、西洋の美術伝統を受け継ぐ写実的な作品の間の大きなズレの存在の指摘は、アフリカン・アートという概念の再考を促す、重要な知見だといわなければならない。

本論文の結論部では、一連の作業から得られた知見を今一度整理して提示したうえで、成果がまとめられている。とくに、西洋的な教育を受けたアフリカ人アーティストに対してまで、「アフリカの」という定式的な西洋的嗜好が押し付けられていること、他方で彼らは一部でそれを受け入れ、一部でそれに抗いながら制作活動をおこなっていることが、改めて指摘される。

本論文は、まずもって、足掛け十年、通算23カ月にわたる長期の現地調査の成果を踏まえて、ナイジェリアのイレ・イフェにおける「アーティスト」たちの活動と「アート」のありかたを詳述した、良質な民族誌として評価される。その記述は、一つの都市に視座をおいたものながら、同時に、ナイジェリアの近代美術史、美術教育史についての記録としても価値を有するものとなっている。

本論文の達成は、しかし、むしろその記述と考察を通じて、従来の知見や研究を相対化し、その再考を促すものとなっている点にこそあると思われる。

第1に、本論文が、西洋近代においては、生活とは切り離された領域に属するものと考えられることの多いアートを、アーティストの日常生活に注目することで、生活世界のなかでとらえなおしたことが評価される。しかも、そこで明らかにされたアートとアーティストのあり方は、現代の欧米社会においても妥当するものである可能性をもっている。その点で、本論文は、西洋近代がつくりあげてきたアートという概念を相対化するものになっているといつてよい。

第2に、本論文は、オラインカを例に、ヨーロッパ人の求めるアフリカン・アートと、アフリカのアーティストが求める自らの「アート」との間の隔たりを明快に指摘してみせた。それは、西洋でつくり出され、そのまま世界的に流通してきたアフリカン・アートという概念の再考を促すものである。

もとより、本論文にも、課題として指摘すべき点は散見される。「アーティスト」と呼ばれる人びとに範囲を限定することで、先に述べたとおり、本論文は、ナイジェリア近代美術史、ナイジェリア美術教育史論としての価値を獲得しているが、一方で、「アーティスト」と呼ばれないモノ作りの職人たちと、「アーティスト」たちとの関係については十分に論じられていない。その点の議論がさらにおこなわれていれば、ここでいう「アーティスト」たちの輪郭が、より鮮明に浮かび上がってきたと考えられる。また、本論文は、従来の研究の盲点をすくい上げたものといえるが、それだけに本論文で明らかになった諸事象は、ナイジェリアの他の都市、あるいはアフリカの他の都市にもみられることが推定される。他地域における併行現象を視野に入れた議論がなされていれば、本論文の訴求力はさらに高まったと考えられる。

ただ、これらの点は、いずれも今後の研究の展開の可能性を示唆するものであり、本論文の価値を減じるものでは毛頭ない。

上記のとおり、本論文は、文化人類学と美術史学の枠を超えて、アートの研究としても、

(Separate Form 3)

アフリカン・アートの考究としても、また民族誌記述の分野でも、従来にない新たな貢献をなしている。以上の点から、審査委員は全員一致して、本論文を博士の学位に値すると判断した。